

茶の花

池松 孝子

茶の木はツバキ科の外来種で中国から渡来した。飲用される茶は鎌倉時代になって栄西禅師が種子と製法を伝えたといわれる。野生では七メートルを超える高木もある。茶の生産で栽培するときは低木に仕立て刈り込まれる。茶は古くから栽培されてきたため、自然林にも入り込んでいる。また縄文、弥生遺跡からも茶の実が発見されている。山道を歩いている時など、近くに人家がない所で茶の木を目にすることがある。それは自家用の茶の木であり、かつてそこには集落があったことが偲ばれ懐かしい。

小道あり日陰のありてお茶の花

細野 恵久

茶は晩秋に小さな白い花を咲かせる。白い五弁の小花の真ん中の黄色い雄しべが美しい。可憐という言葉がぴったりで気品のある色合いだ。葉の陰にひっそりと見せるその控えめな姿、ほんのりとした香りが好まれ茶花としても歓迎される。金色の蕊の輝きは他に例えようがない。和菓子のモデルにもなる。三十年位と言われる茶の木としての役目を終えた古木の味わいのある枝ぶりも面白い。すると茶花としての価値も増してくる。

だが、お茶の花は咲かない方がいい。茶農家では茶の花が咲くことは木が衰えて来た証拠として花は即、摘んでしまうという。花が咲き、また実が実ると畑の養分が花に取られてしまうからだ。畑の管理に不都合があったり、その年の天候が思わしくなかったりすると花が咲くことがあるという。夏に雨が足りなかった時などだ。

お茶と言えば、我々は茶葉を乾燥加工して飲むが、中国では古くからその花を茶として飲む習慣があり、茶にいろいろなものを入れて飲む「茶の花茶」もある。試したがなんとも酸っぱくて、どうも私の口には合わない。

鳥根県の出雲地方を旅行した時、ぼてぼて茶を出されたことがある。番茶をやかに沸かし、その中に乾燥した茶の花や野菊の花を入れて飲むものだ。茶筌の先に塩をつけて泡立てる。その昔、上流階級の抹茶に対抗して労働者たちが飲んだという。